

伝承会報

第十三号 令和六年二月二十七日発行

編集発行 鈴木伸昌

河野文子様追悼

河野文子

大正十三年十一月二十五日生まれ、

父君はバイオリンを製作する工房を営んでおられたそうです。母君は河野の奥様が十一歳の時に亡くなられ、姉と兄の他、下に年子の妹が二人という状況で、家の仕事を引き受けたそうです。

結婚はしないと思い、兄弟の世話にならない様に「お茶漬け屋」を開業。酒席を終えた河野先生が、その店に来るようになる。

昭和四十六年二月に河野先生とご結婚。

昭和四十九年五月二十日河野先生逝去。

令和五年九月二十八日逝去。令和五年十一月二十三日、天王寺に納骨。今は河野先生と共に眠っておられる。

【河野の奥様を偲んで】

鈴木伸昌

河野文子様とは、河野百錬先生の奥様のことであります。

河野先生に直接師事した者が一人もいないにも関わらず、当会の会の名称に河野百錬先生のお名前を頂く事をご許可下さった当会にとつては大恩あるお方であります。

そして、スキージャーナル社の「居合道名人伝」で「さつぱりとした気性の伴侶」と紹介された方であります。

我々は、というか小生はいつも「河野の奥様」と呼びしております。

私が初めてお姿を拝見したのは、昭和六十一年十一月、名古屋市の露橋スポーツセンターで開催された全日本真剣道連盟主催、第四回居合道段別競技大会のことです。来賓席真ん中にお座りになっておられ、他の来賓が席を外しても、微動だにせず、ずっとお座りになっておられました。当時の小生はこのお方がどなたかもわかりませんでした。

次にお目にかかったのは昭和六十三年八月、山形県村山市の居合神社で開催された河野先生遺徳会の席でありました。その後も、二年に一回開催されるこの遺徳会や、名古屋で開催される真剣道連盟の段別競技大会等でお目にかかりました。お目にかかったと言っても、師匠が欠席の場合にご挨拶申し上げる程度でありまして、お話するというようなことではございませんでした。

その師匠が怪我で居合道から離れた翌年の平成十二年、満を持して奥様にお手紙を認め、河野先生のお話を伺いたいと懇願し、快諾を得て、当時住まわっていた三重県の名張を尋ねたのが、本格的に奥様と

お話する機会を得た初めでございます。その後、何度となく名張に訪問し色々なお話を伺うことができました。

名張の家には、当然乍ら、河野先生の仏壇にお線香を手向けたいという居合人が多数おられました。

現在いくつもの連盟(剣道連盟以外。念のため)に別れている居合人も、河野先生生前は全日本居合道連盟一本でありましたから、ある意味当然なのではありますが、河野の奥様には、あらゆる連盟から来賓としてご招待がございました。

当然来賓となると挨拶がつきものとなります。名張の家にはスピーチに関するハウツー本が何冊かございまして、奥様は「主人が無くなるまでスピーチなんてしたことなかったんですけど、主人に恥かかせたらいかんと思うて、こんなん読んで勉強したりしました。」とおっしゃっておられました。

また、河野先生の残された御刀のお手入れの為に、高弟のH先生が年に一回、訪れているということも伺いました。

奥様は、そうした居合人に、小生の事をお話下されておられました。「仙台から来てくれる人が居る」と。

今から思えば、奥様のその一言があったからなのですが、後年小生が色んな先生を尋ねた時に、「ああ、河野の奥様がおっしゃってたのはあなたですか」と、快く応じて下さいました。これも河野の奥様のお蔭であると深く感謝している次第であります。

このように、河野先生が亡くなられた後も、河野先生の奥様はその後のいくつかに別れた連盟を分け隔てすることはなかったし、お付き合いが狭まるということもなかったのであります。

さて、二年に一度の居合神社参拝に来られた河野の奥様に同行する事に依って、小生も色んな方とお目にかかる事が出来ました。

河野先生が居合神社に初めて参拝された時の宮司が押切喜六という方で昭和三十六年にはお亡くなりになられている。河野の奥様は押切宮司お子様の家も訪問され、お線香をあげておられ、またお墓参りもなされておりました。という事は、当然河野先生生前も押切宮司の家を訪ねお線香をあげられ、墓参もされていたということが拝察できます。(今思えば、お宅訪問と墓参に同行できたことは幸せな事であります。)

また、河野先生が居合神社に碑を建てるとなった時に、依頼を受けた土地の石工であるの安達さんが、それまでに立てたことの無い大きさだったために相談したのが大工の工藤さん、碑文の書を担当されたのが伊藤潮風さん。河野先生は押切宮司も交えて、この方々との交流をととても大切にされ、二年に一度居合神社を訪問なされると「水入らずの会」と称して、旧交を温められたそうですが、この会は河野先生が亡くなられた後も続いており、小生も一度だけ参加を許されたことがございます。

また河野の奥様が、当時もう亡くなられていた伊藤潮風先生のお宅にお線香を上げに行くときも同行させて頂いたごとき、物凄く、物凄くおいしい茄子漬を御馳走になったことも、大切な思い出であります。

また、河野の奥様は、大分県の日ヶ瀬にある河野先生の御実家にもたびたび訪れておられました。

このご実家には河野先生の生誕碑が建てられており、小生いつかはその生誕碑を拝見したいと懇願していましたが、奥様をお願いしたこ

とで、平成十五年八月と平成二十三年五月の二度、生誕碑を尋ねる事が出来たのであります。

さて、名張の家に何度か泊めていただいた小生は、当たり前のことですが、奥様手作りの料理を頂きました。是と同じものを河野先生も召し上がられたんだなと思ひ、その感慨にふけりながら頂戴した事を思い出します。

これは余談ですが、或る時、御漬物の盛られた器が、大きさと云い姿かたちと云い、これまで見た事の無い風情のものでしたので、思わずお尋ねしました。「奥様、これは本来は何を盛り付けるための器なのですか」と。そうしたところ

「今はもう、こんな使いませんでしょうね。これ杯洗です。」

杯洗、酒席で、「お流れを一つお願いします。」とお願ひすると、主賓が、杯洗にたたえられた水で自分の使っていた盃を洗って、手渡し、お酒を御酌。頂いた人間はここでようやく「御返杯」と主賓にお酒を注ぐことができるという、そのための小道具。

かつて東宝映画、森繁久弥の社長シリーズの宴会シーンで垣間見た、昔の日本の酒席の風習。これが料亭とかではなく、個人の家にあるというのが、また河野先生の人となりを偲ばせてくれます。

河野先生は訪ねてきた方に泊まっていく様に奨め、その晩は必ずと言っていいほど酒席となったそうです。そこでもこの杯洗は登場したのでしょうか。

(ちなみに、小生はその後あらゆる陶器店で杯洗を探しましたが、「今どき作ってないよ」とあしらわれました。)

そういえば、河野家の酒席の写真を見せて頂きました。夏真つ盛りのようで、皆ランニング姿でビールを飲んでいたのは、河野先生、後に大日本居合道連盟をつくるH先生、後に真剣道連盟をつくるH先生でした。本当に楽しそうでした。

そのようにして泊まらせていただいた時に、本当に様々な河野先生のお話を教えていただきました。

河野先生が、仙台平の袴はお好みではなく、洋服の生地で袴を仕立てて居られたこと。

朝起きると真向法をなさっておられたこと。

始終体を動かしておられ、バスの停留所でバスを待っている間も常に体のどこかを動かしておられたこと。

また、河野先生は晩年に「正座の前」を抜かれるときに左膝を引いておられました、その動作に就いて、さる医師でもある高段者の方が「河野先生は左に脱腸があり、抜く時そこに触って痛いから左膝を引いて抜いていた」と解説していたとの話を伝聞で伺ったことがございます。

そこで、奥様に真偽のほどを確認したこともございました。奥様の仰られるには、「確かに左下腹に脱腸はありましたが、本人は痛がることなんてございませんでした」とのことでした。発言者が医師だから、皆信じているのかもしれないが、いい加減なことをいうものです。

私事で恐縮ですが、現在小生も脱腸となりましたが、全く痛くもかゆくもございません。

その他、宗家継承の顛末も、総て伺っておりますが、それはまた別

のお話。

【河野先生の奥様と私の思い出】

佐々木理恵

今思えば、奥様とお話をした時間はとても短かったと思います。

十四年前の二月に入門したての私は、その年の八月に熊野居合両神社で執り行われた河野先生遺徳会に参加し、そこで初めて、河野先生の奥様とお会いしました。

奥様の当時のお住まいが三重県の名張ということもあり、大阪や京都での演武会にお邪魔する折にお家を訪ね、本当に他愛のない話を夜中まで奥様としていたことを思い出します。

奥様は日本各地の美味しいお菓子を取り寄せるのが好きだったようで、九州の専門店で作られたかりんとう、神戸の洋菓子店が作った、真っ白な粉砂糖をたっぷりまぶしたサクサクのクッキー、大阪から買ってきた芋けんぴを「これ、本当に美味しいのよ」と言ってお台所から、河野先生の仏壇がある応接間に運び、テーブルいっぱいにお菓子を広げ、テレビを眺めながら二人でボリボリ食べる……ということが恒例行事になるくらい可愛がっていただきました。時には居合の「い」の字すら出ることがなく過ごす時もあり、「居合の話のひとつもせずに主人に怒られますわな」とふたりで笑ったのが良い思い出です。

それくらい奥様とは居合の話はほとんどしませんでした。河野先生が奥様にも居合を習わせようとしたエピソードを伺ったことがあります。ある日、ご自宅の二階にある道場へ呼ばれた奥様は、なんの用事だろうと行ったところ、刀を一振り手渡され稽古をやったのだそうです。奥様は必死に覚えようとしたようですが、今までやったことのない

動きばかりで「いや、難しわあ、難しわあ」と言いながら続けた結果、次の稽古はそれつきりなかったそうです。

「主人は私にも居合をやらせたかったのだらうけれど、不器用過ぎてアカンと思っただんですかねえ」と笑ってお話してくださいました。

その他、河野先生との日常生活をお話しくださることもありました。河野先生は大の動物好きでいらしたようで、犬の他にインコを飼われていたこともあったそうです。河野先生にとっても懐いたインコは、夜になると籠を抜け出て、河野先生の枕元までやってきて一緒に寝ていたこともあるとお話くださいました。

今思えば本当に他愛のない話ばかりだったと思いますが、私にとつて心の深い所で今も鮮明に残っている大切な思い出のひとつです。ただただ今は、ご冥福をお祈り申し上げるばかりです。

終りに、河野先生が小学生の頃にかかれた絵と習字が残っておりまして。それを奥様は屏風風にカラージュしておられます。拝見いたしました。私もかつて絵をかじったことがあります。それはそれは小学生の描いた絵には思えず、写メしてしまいました。

河野先生には叱られるかも知れませんが、ご披露して私の文を終わりたいと思います。

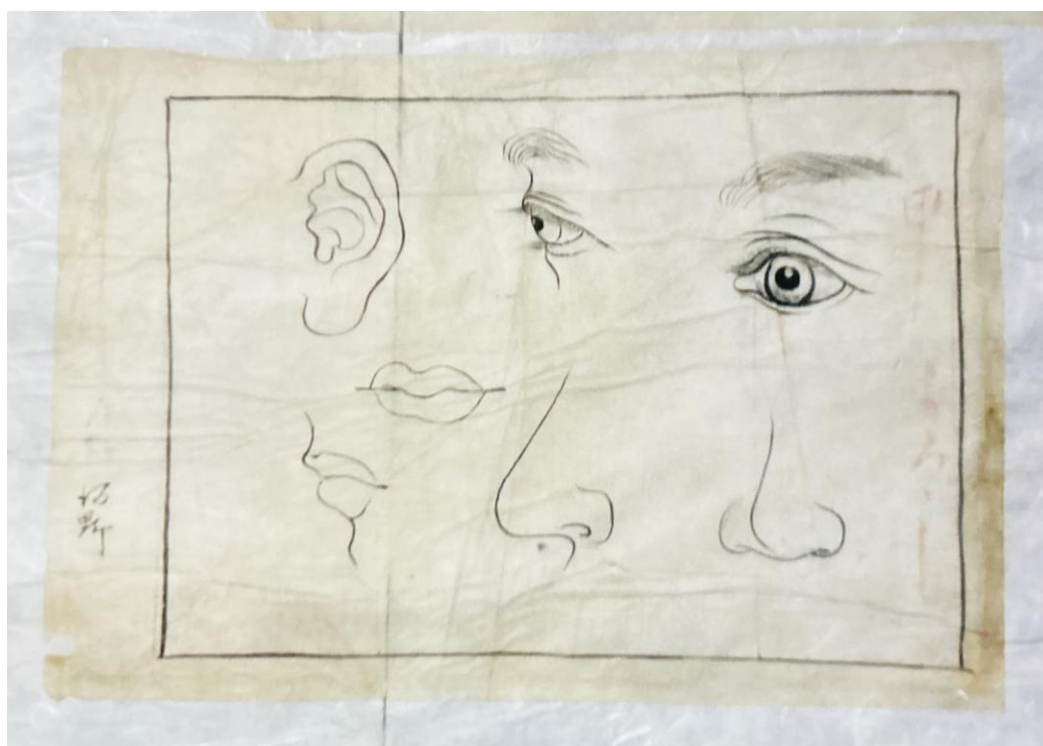
解説 ご自宅二階にある道場

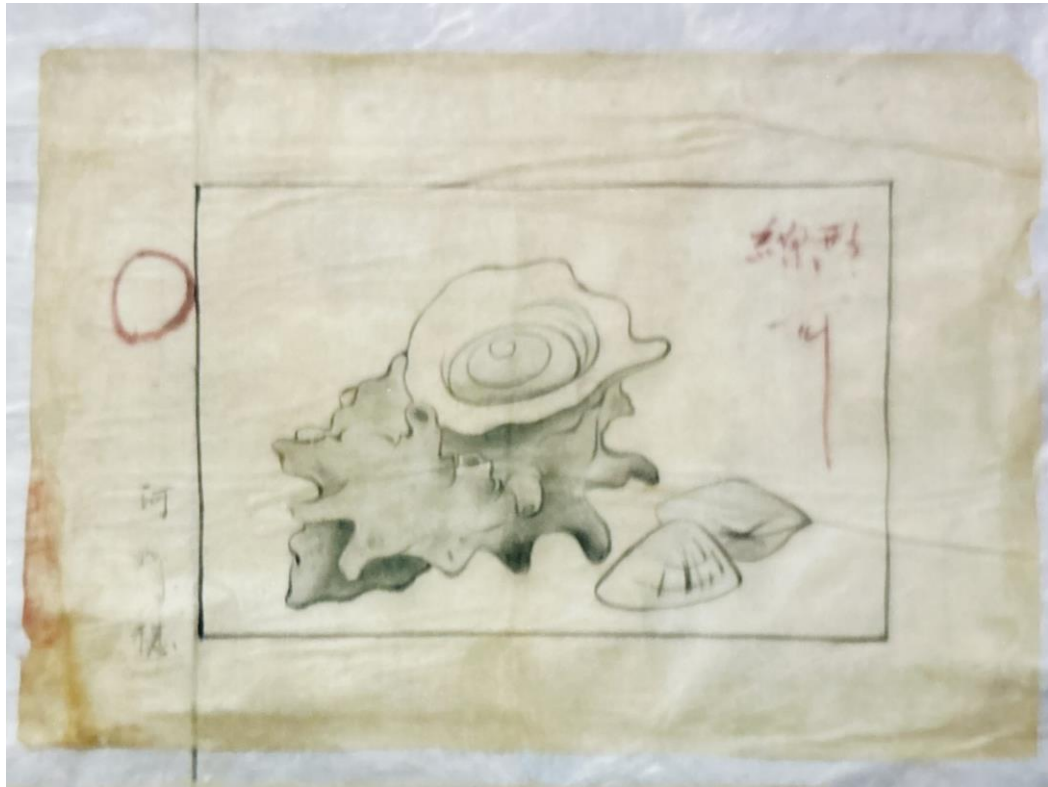
昭和四十二年十月一日、日曜日に開かれた「洗心百錬館」道場のこと。道場生は中垣雅司先生、谷島一雄先生、長谷川俊明先生。それこそ膝突き合わせる距離で、河野先生の居合を勉強できたことは羨ましかぎりです。長谷川先生から伝授頂いた河野先生の居合のある動きに就いて、後にこの自宅道場の話を伺い、「成程膝突き合わせる距離

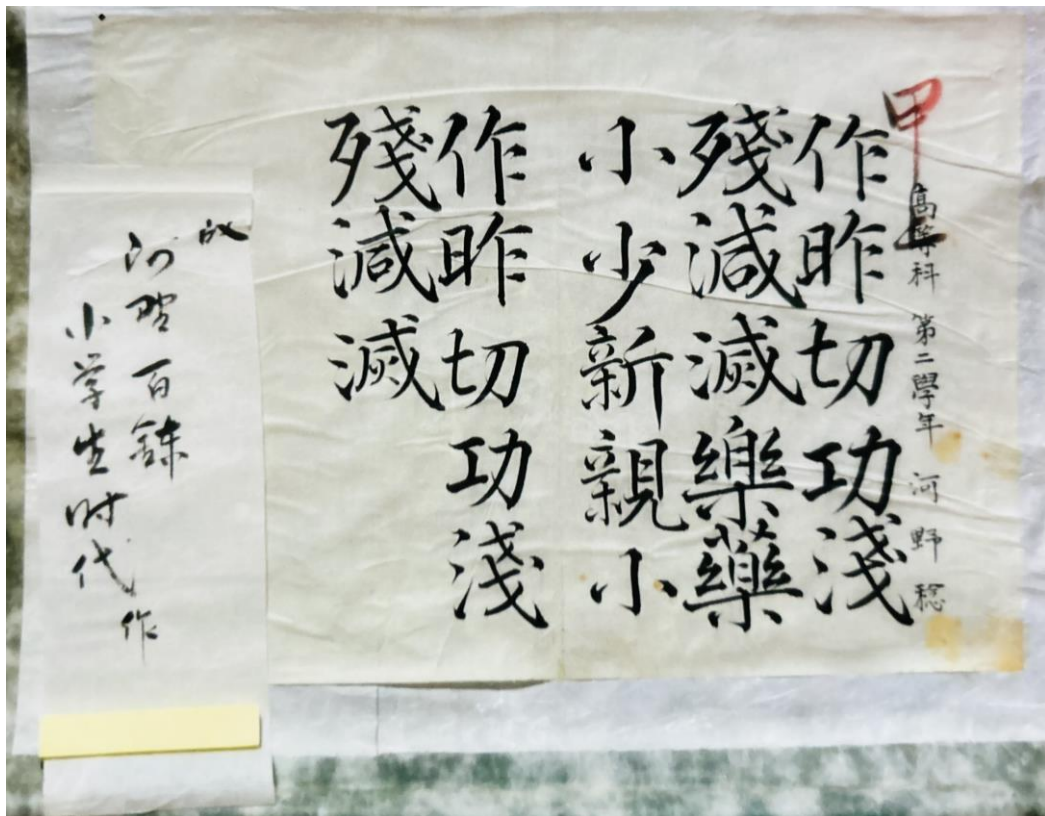
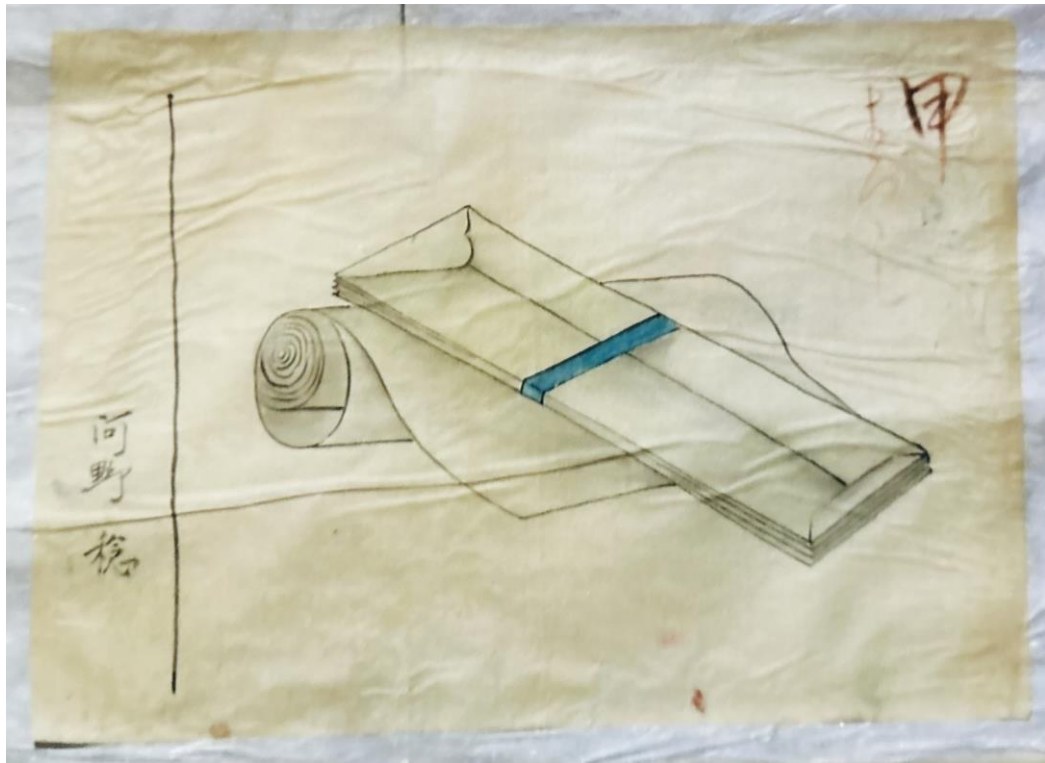
でなければ、この動きは盗めない」と得心した次第であります。

河野百錬先生 子供時代の絵と習字（七点）

解説 鈴木伸昌







甲

高等科 二学年 河野稔

冬の来りてさく花は

比良のたかねの暮の雪

唐崎のつ松

夜の雨に名をえたり

堅田の浦の浮御堂

落ちくる雁のながめあり

三つ五つちつれて

波の上を歸り行く

矢走の沖の舟人は

聞きしか三井の晩鐘を

冬の来りてさく花は

比良のたかねの暮の雪

唐崎のつ松

夜の雨に名をえたり